重度心身障害児への人間学的接近（第8報）

――かかわりの視座をみつめて――

譲　　西　賢[1)]

私たちが，責任をもって，この子たちと取り組んでいこうとする際に，もし，限界があるとするならば，その限界は，“かれら自身”の能力の限界によるものではなく，救いの手を差しのべようとする“私たち自身”の能力の限界によるものである。

――ロバート・ケネディ――

はじめに

ことしで4回目のコロニー教育研究実習に取り組むことになる。4回といっても，日数にすれば1回5日あわせてわずか20日間の取り組みにすぎない。この20日間という時間が，重度精神薄弱児・重症児とよばれる〈かれら〉と私が取り組み合うなかで，どれだけの重みをもっているのであろうか。とりわけ〈かれら〉にとって，毎年夏のおわりに突然何のまえぶれもなく，自分たちの世界に土足で踏み込んできて，5日間過ぎれば忽然と去っていく者とのかかわり，長い人生のなかでは，それこそ点にしかならない時間だけのかかわり，いったいそれが，たった1回きりのかけがえのない人生に，どんな貢献をしているといえるのであろうか。

ふたりの相互性―すなわち，私の成長が〈かれら〉の成長を促し，〈かれら〉の成長が私の成長を促すという発達の一体性を無碍に信じての取り組みでいいのだろうか。もし，そういいきるとするならば，〈かれら〉と私とのかかわりのなかで，〈かれら〉の成長，私の成長をどう考えたらいいのだろうか。

こうした問いかけをくり返しつつも，答を見つけることもできずに過ごしてきた4回にわたっての20日間である。一方では，こうした問いかけをすること自体が，追いこめられ，社会の片隅で救いを求める声すら出せずに，極限状況を生きている〈かれら〉をながめようとしている私の冷めた眼の本性ではないのか？　答を見つけたからといって，極限状況を生きる〈かれら〉とどのようにふれ合えるというのだ？　そんな答こそが，私の〈かれら〉に対する欺瞞であり偽善ではないのか？　もっともっと，ありのままの，もがきながら生きざるを得ない人間存在としての〈かれら〉を見つめることはできないのか？　もっともっと，〈かれら〉の生きざまとともぶれすることはできないのか？　そんな問いかけを始めた私でもある。

〈かれら〉と生活してくるなかで，(むろん生活といっても，朝食から夕食までのいわゆる昼間だけではあるが)，体験の観念的・抽象的意義づけを求めようとした気負った私に出会い，そんな私から，実在的・具象的体験にのめり込んでいく私が巣立ってきたように思われる。どんな私であっても，いつも暖かく受けいれてくれる〈かれら〉であるのに，受けいれてくれてる〈かれら〉の眼には気づかず，“やすものの共感”をふりまわす私を〈かれら〉に，いつの間にか押売りしていたのかも知れない。

4回目の実習のなかで，私に映った〈かれら〉の生きざまと，その生きざまに揺り動かされた私を知ることによって生じた私の内での，人間存在への問いかけ，私の内なる〈かれら〉と出会うことによって直面せざるを得なかった私の内なる私への疑問の投げかけ，そうすることによって，生きてる〈かれら〉の，私の，そして人間存在の原点を見つめてみたい。

I “おまえにそんな資格あるのか？”

4回目の実習の場は，こばと学園中2病棟である。こばと学園は，コロニー中央病院の病棟として位置づけられているため，外からのお客様的存在としての私たちにとっては，ここの物理的居心地は，きわめて快適なので

1）名古屋大学大学院教育学研究科博士課程(前期課程)

ある。すなわち，全棟冷暖房完備され，各病棟内は，デイルーム，寝室，トイレ，がきちんと区別され，デイルームには，生地の厚い明るい色彩のフワフワしたじゅうたんが敷きつめられ，時間さえ許せば，いつでも〈かれら〉の手でスイッチが入れられるカラーテレビも設備されており，室内にいくつか置かれているクッションを枕に，それを楽しむことができる。全職員数は，〈かれら〉の総数とほとんど同数であり，3交替制によって24時間にわたる介護をうけることができる。糞尿の交錯したような独特の鼻をつく異臭はまったくなく，Blatt,B.(1969)が暴露した施設の状況に比して，まったくの別天地であり，文化的生活を"ひとつの家族"として送っているのである。

こうした物理的・文化的状況は，そこで生きてる〈かれら〉をぬきにして，実習を始めようとする私たちには，まず何よりも都合がよかった。ありがたかった。少なくとも私にはありがたかったのである。猛暑のなかで，汗をふきふきグッタリとした倦怠感を味わう養楽荘・はるひ台学園よりも，どれだけ快適なことか。こうした状況だけから，重複障害に苦しみ・闘っている重症児である〈かれら〉に対して，「恵まれた所で生活してるんだね。しあわせだねえ」という気持ち・眼を，私は向けたい気がする。生存在としてギリギリの極限状況まで追いこまれている〈かれら〉が，〈かれら〉だからこそこうした世界，こうした物理的・文化的世界で生きているんだ，生きざるを得ないのだという意味の重みに気づいていながら，それに相反して，こうした文化的状況だけから，「恵まれた，しあわせな」という眼を向けてしまう私である。

こんな私が，〈かれら〉とともに取り組み合い，〈かれら〉とそして私の人間存在の意味を見つめ，考えようとする資格があるのだろうか。〈かれら〉の苦しみを，まさに苦しみとして，もがきをもがきとして，本当に，実感・ともぶれすることができるのだろうか。気やすい同情を，ともぶれとして，共感として，私自身が勝手に評価・合理化して，偽りの共感・やすものの共感を，ふりまわしていたにすぎないのではなかろうか。こうした私に気づいた時，"おまえに，〈かれら〉と取り組む資格があるのか？"という天命を聞いた気がしてならない。

それでも私は，動き始めた。そんな私であることを打ち消したいあわれな気持ちと，"そんな私であるはずはない。"という愚かなおごりと，"そんな私だとしたら日常において，情緒障害児・自閉児を主とした治療活動ができるのだろうか，活動をする資格があるのだろうか"という焦りからの動きでもある。

過去3回のコロニー実習15日間の〈かれら〉との取り組みのなかで，いかなる人間存在のあり方であろうと，いかなる宿命的状況であろうと，生命の重み・運命の重みを背負って一途に歩みつづけている生存在としての〈かれら〉と私の取り組みのなかで，こうした生存在としての〈かれら〉と私を見つめる眼，ふれあうこころの成長を自負しつつ生きてきた私であったはずなのに，見つめること，ふれ合うことのできなさ，むずかしさに打ちのめされようとしている私なのだ。自負していたこと，それは〈かれら〉の生存在に何ら眼を向けない，何ら耳傾けない，私の高慢な装いであったのだろうか。

こうした私である時，ありのままの私をぶつけていく担当のケースが定められていた方が都合がよかったのかも知れない。ひとりの〈かれ〉にぶつかり，〈かれ〉との関係を通じて私自身を見つめることが私には必要だったのかも知れない。しかしながら実際には，担当ケースはなかった。自分なりのテーマで，中2病棟に入り込んでいくことが課題であった。担当ケースはなく，取り組みの枠ぐみも定めぬ状況のなかで，どう動くかは，私にとって戸惑いがないはずはない。やっぱり私は，自分をぶつけていくべき〈かれ〉を捜し，その〈かれ〉にかかわり，そのかかわりあいのなかで自分を見つめようとせざるを得なかった。そして，中2病棟の〈かれら〉の家族・世界が，どんな世界であるのか，どんなダイナミックスの家族であるのか，私の眼を通して見つめようとした。そうした私を受け容れてくれた〈かれら〉であり，保母さん・指導員さん・看護婦さんであった。〈かれら〉の世界をかき乱すだけの私であるのかも知れないのに。

Ⅱ　ミカちゃん*への挑戦

実習1日目，あの人，この人と縁あるごとにかかわりあうなかで，特に私の目を注がせるひとりの女性，いや印象では女の子，少女がいた。年令は28才。右手を耳ほどの高さにあげてひとり一方的に話している。話すというより，独語というか遅延性反響言語というか，物理的には皆の中にいても，あたかも広大な砂漠のなかにひとり身をおいているかの如く，自己の世界のなかだけで生きている人である。その名はミカちゃん。私がどのように話しかけようと，どのように体にふれてかかわろうと，「コレナンダコレ，サアサアミカチャンコンドヨ，サアドウダドウダ，サアオチルヨ，オチルヨ」と一方的に，過去のある人が話しかけてきたらしいことばの独語だけである。発音はきれいに，イントネーションも豊かに，若干三河弁を交えての話しかけである。このことばだけがミカちゃんの存在を示すものであり，ミカちゃん自ら

* 以下本文中に用いる名前は，すべて仮名である。

の動きであり外界への訴えである。

盲目である彼女のこころの網膜には，豊かで生き生きとした世界が映しだされているのであろうか。この世界だけが実在する彼女の世界なのだろうか。食事にしろ，排泄処理にしろ，介助を受けている時も，この世界はかわらない様である。かと思うと，誰かが話しかけたことばをフッとオーム返ししたりもする。きれいなメロデイを不明瞭な歌詞をともなってつぶやいたりもする。座位して1時間は，軽くそのまま続けているのである。

私の眼が彼女に向いたのは，こうした彼女の世界が，今までに私が味わったことも，ふれあったこともない不可思議なベールに包まれた世界に思われたからである。盲目でそうした日々を送る彼女を知りたいと同時に，私自身が，彼女の世界に入り込む余地がないものかと好奇心めいた，いわば彼女への挑戦でもあったわけである。

ミカちゃんの口から，絶えることのない泉の如く湧き出てくるこのことばは，一体誰のことばなのだろうか。たしかに，その場でオーム返しすることばもあるのだが，大半は，三河弁をまじえたことばである。三河出身の彼女であることを考えると，こばと学園入園以前のことばなのではなかろうかとも思われる。おそらく，母親のことばが，過去の生活・母親へのノスタルジアとして不滅の泉の如く湧き出ているのではなかろうか。しかし，何故？，もう何年もこばと学園の中2病棟で生活しているのに，それ以前のことばのなかでしか，ことばで象徴される世界のなかでしか，彼女は生きられないのだろうか。

いったい今の彼女は，何を訴えて，この中2病棟に存在しているのであろうか。こばと学園で，彼女にしみついた新たなことばはないのだろうか。この何年間かの中2病棟での生活のなかでの彼女の発達は，彼女にとって，本来の場での発達ではなかったのだろうか。わからないことがあまりにも多すぎる。

それでも，まちがいなく彼女は，今，私の目の前で生きているのだ。いろんな過去を背負いながら，今を私と一緒に生きている人なんだ。仲間なんだ。ながめているだけで，仲間である私の存在が彼女に伝わるものか。わからないことだらけのまま，私はとにかく彼女に声かけた。おそるおそるではあるが。「ミカちゃん，こんにちは」一瞬，彼女は自分のことばをとめて，突然聞こえてきたこのことばを十分に吟味しているように見えた。とぎすまされた眼で，私のこころを見透かさんばかり。と思うとすぐにもとの彼女に戻っている。表情は何らかわることなく，何事もなかったかのように。

続いてまたことばをかけていく私。そのたびに自分のことばをとめて，耳傾むける彼女。それだけの反応しかもらえない私。彼女にどう評価されたのか，どう吟味されたのか，確かめたくて仕方がない私である。イヤ，確かめないことには不安で不安でやりきれない私なのだ。

これまでの，自閉児との治療体験があるからこそ，"通じないはずはないのだ"という自信と，そのまた一方での，"通じあえた，わかりあえた"という実感のなさ，そのうえ，保母さん，指導員さん，看護婦さんの視線も背中に感じる。彼女に負けられない私であったのだ。彼女を抜きにしたところで，私ひとりが気負っていたのだ。彼女から拒絶されることを，受けいれるわけにはいかなかった。少なくともその場の私は，そうだった。吟味したこたえを，なかなか態度で示すことはなく，すぐに独語の世界に戻していってしまう。たしかに，私のことば・話しかけには耳傾むけてくれるのだが，私の存在そのものに心傾むけていてくれるのだろうか。

肩に手をまわしてみる。スリルと腕の下を抜けて背を向けてしまう。「やっぱり，まだ通じないのか？」いつしか，傍にいるだけの私になっていた。

彼女が口ずさむメロディは，"赤とんぼ"が主である。逆に私が"赤とんぼ"を歌いかけてみる。驚いたように歌をやめ，私の歌を耳で確かめる彼女。しかし，すぐにまた何事もなかったの如く自分で"赤とんぼ"を歌い始める。私の歌・私の声では通じなかった。

食事も，ごはんにミソしるがかかっていないと絶対に食べない。そうかといって，ミソしるがかかっていても，私のように「ミカちゃん，おミソしるのごはんだよ，さあ食べよう。アーンして」と，おっかなびっくり介助していたのでは，二口・三口がせいぜいである。茶碗一杯のごはんを口に運びいれるには，私では何ともできない。

食事時間は，やがて終りになる。惨めな姿ではあるが，保母さんに介助を交替してもらう。「さあさあミカちゃん。おミソのゴハンよ。さあさあミカちゃん，ミカちゃん」歯切れのいい調子で，ポンポン声かけていかれる。なかば，彼女のつぶやきの世界に強引に侵入していく。そして，強引に保母さんの世界に引きずり出してくるようである。それでも間違いなく彼女は，全部を食べた。

自分一人で戸惑っているだけでは，そこに何ら相互関係は芽生えてくるはずはないのだ。戸惑ったかかわりこそが，ふたりのふれ合いに障壁となっているのである。保母さんは，そのことを無言のうちに私に伝え返してくれた。ひとりよがりの観念の世界で彼女にかかわろうとしていたことを，保母さんは見事に私に指摘してくれた。

3日目の午後，偶然にもミカちゃんの母親が中2病棟を訪れた。繕い物の奉仕が主で，ミカちゃんとはほとんど接しない。昼食は，おミソしるがかかっていたにもかかわらず今日は一口も食べようとしない。誰が試みて

も同じである。夕食，これもおミソしるで彼女の食欲をひき出そうとする。ふたたび拒否。誰がやってもダメ。最後の切り札，母親に食事の介助をお願いする。「さあさあミカちゃんおミソのごはんよ」どこかで聞いたことのある声，どこかで聞いたことのある抑揚，どこかで聞いたことのあるなまり。そうだ！ミカちゃんが口走っていることば，そのことばが今，この母親の口から聞かれたのだ。あれ程誰もが食べさせようとしても拒否し続けていた彼女が，そのことばにとぎすまされた全神経を集めて耳を傾け，吟味し確かめ確かめ口を開いてごはんを受けいれた。茶碗の底が見えるのに時間はかからなかった。食事が終わると母親は，すぐに席を離れていく。その足音が一歩一歩遠のくのをたしかめたしかめ。足音が消えてしまうとふたたびいつもの彼女がそこにあった。

３日目の拒食は，“今日は母親が来ている”という彼女の確信にもとづくものではなかったのだろうか。“今日，私が食事を摂るのは，あのなつかしい母親の手からだけなんだ”というミカちゃんの自己主張ではなかったのだろうか。これほどまでの彼女のなかの母親なのに，その母親と離れて暮らしているミカちゃん。淋しくないはずはないよなあ！苦しくないはずはないよなあ！だからせめて，こころのなかで，母親との世界をまもっているんだよなあ！こうした宿命を背負って生きてる叫びがミカちゃんの独語ではなかったのか。

宿命とはいっても，これほどまでの母親と離れて，この中２病棟のなかで，どうして生きていなければならないのだろうか。一回きりの人生なのに，いつわりの人生にならないのだろうか？　疑問を疑問とせずに，ありのままの現実を受けいれて生きてる，叫んでるミカちゃんが私の前にいる。

「ミカさん，オンブ」と私は彼女に声かけた。なぜだろう？ミカちゃんは，私の背中にごく自然に身を任せてくれた。うれしかった。３日目にして初めて私の声が彼女に届いた。そんな気がした。中２病棟のなかを，ふたりのいきさつを見守っていた保母さんに，指導員さんに，看護婦さんにこれ見てくれといわんばかりの気持ちで私はただ歩いた。

この関係は，私とミカちゃんのかかわりの成果なのだろうか？ふたりの相互関係の発達なのだろうか？私にはそうは思えないのである。ミカちゃんの私に対する眼に，私に対する吟味に，このひと時，こたえられたにすぎないのではないか。保母さんと母親に教えられながら。関係とは，ここから始まるかかわりあい，相互交流の展開でなければならないはずだった。しかし，私とミカちゃんには，これ以上のものは何らなかった。この瞬間の感触のここちよさだけで十分すぎた私であり，それ以上のかかわりあいは，苦しくて痛い私であり，かかわりきれなかった私である。“そんなことでいいのか？”の声を脳裡にききながら。

Ⅲ　「食べられます。大丈夫です」

今度，４回目の実習で，もうひとり私の眼を魅きつけた女の子がいる。名前はエイコ，15才になったばかりであったと思う。色白でとっても可愛い子。マヒのため手足は思うにまかせられない子。とっても神経質で，その過敏さはからだ全体の緊張となって無意識のうちにあらわれる子。私の話しかけに対する理解は十分できる子。ことばも不明瞭な発音ながら話せる子。中２病棟では，リーダー的存在であり，よく目立つ子。中２病棟で明るさをふりまいてくれる子。私たちをもっともお客様として接してくれた子。エイコちゃんは，こんな子である。

私がとばす酒落やジョークに，大笑いで反応し私の労をねぎらい慰めてくれる子である。笑いの明るさは，中２病棟では一段ときわだつのである。ラポートということばで，私とエイコちゃんの関係を形容することも客観的には可能であったろうと思う。食事の介助を私は気やすくひき受けた。緊張するはずはないという一方的ではあるが，自信をもって介助にあたったのである。エイコちゃんも喜こんで私の行為を受けいれようとしていたと思う。

一口目はよかった。二口目になるとどうだろう。彼女は一生懸命口をあけようとしているのに，歯と歯が口を堅くとざしてしまい，スプーンがまったく入らないではないか。“こんなはずがあるものか”と気負ってジョークをとばす私。もう顔は笑わないエイコちゃん。“バシャーン”彼女の片腕が，水泳の背泳のようにあお向けに寝ている前方へふり降ろされ，膝枕の傍らにあった彼女の食器を直撃した。“ナントシタコトダロウ”どうとりつくろっていいのかわからない私に，「あらあら，またやったわねえエイコちゃん。このお兄さんに慣れてないから仕方ないわねえ」と声かけ，かわりの食事を，またたく間に食べさせてしまう保母さん。すぐ食べてしまうエイコちゃん。このひと言で，どれだけ私は救われたことであろう。“慣れが足りなかっただけなんだ”わずかな不安を感じながらも，“今度は，きっとうまくいくさ”と動じなかった私である。「ごめんなさい。」と先にわびる彼女。「イヤイヤ，悪いのは僕だよ，ゴメンネ」ととりつくろう私。

２度目のチャンスはすぐにおとずれた。食器を手の届かない所において，１度目よりも，一層仲良くなっての食事である。二口目やっぱり口が閉じてしまう。苦し気に体を硬直させているエイコちゃん。「ゴメンネ，エ

イコちゃん」今度は私が先にわびる。笑顔で保母さんが介助を交替してくれる。

素直にその笑顔を笑顔として受けとれない私である。惨めさが走る。そして不安が…　私自信のエイコちゃんへのかかわりは，根底では彼女にとって不安を煮起させるだけなのではなかろうか。慣れの問題ではなく，私だったらいつまで経っても，彼女に食事を全部食べてもらうことはできないのではなかろうか。敗れるべくして敗れた敗残兵ぶりをさらけ出した私であったような気がする。そんな私を尻目に，エイコちゃんは，保母さんの介助を得て食事を食べ終えてしまう。

4日目の夕食で，やっと3度目の挑戦を決心した。エイコちゃんに申しわけない気持ちと自分の惨めさからの逃避と二つの理由で2日間介助せずにいた私である。その間デイルームで，手があく時を見ては，彼女と遊んだ。しりとり，トランプ，遊びあったというよりは，遊びをえさに仲良くなろうという下心があった私なのだろうか。

3度目の挑戦も結果は同じであった。彼女は，なぜそんなに怯えてしまうのだろう。何が私と彼女に足りないのだろうか。"おまえにそんな資格あるのか？"このことばが，頭からついて離れない。

実習最後の日の朝食，「ようし，今度こそ」意地半分でふたたび介助を決した。決したというより，保母さんたちが，私に彼女の食事を割り当ててくれたのだ。冷やかしではなかった。「エイコちゃんが食べさせてくれって言ってるよ」と言って私を変に応援してくれる。「食べられます。大丈夫です」と"おはよう"がわりに彼女は私にあいさつする。うなづきながら一口目「いいかな？ようし，いいぞ！」二口目「今度もいいかな？」と思った時早くも一撃くらってしまう。

勝負は，あっけなかった。気負った私であればある程，苦し気に緊張度を増してしまう彼女。屈辱の4連敗の私。「食べられます。大丈夫です」と言う程努力している彼女なのに，私を励ましてくれる彼女なのに，彼女を緊張させてしまう私。何かが足りない私。"慣れだけの問題なんだ"と居直る半面，自分の恥部を彼女に見透かされた思いの私である。「食べられます。大丈夫です」自分に言いきかせるように呟いたエイコちゃんのこのことば。食べさせてもらう境遇に身は置いていても，その状況のなかで，自分を叱責し，相手をいたわるエイコちゃん。

その生存在は，社会の隅っこ・こばと学園中2病棟のなかであっても，人とともに燃える素朴で美しい逞しい炎を培っている。この炎の熱さを本当に知るのは，まだまだ先の先の私なのかも知れない。

Ⅳ　「家族」としての連帯

所詮この世に"かくの如く生きるのがふさわしい"とか"生きる為にはこうあるべきだ"ということは，生理的条件などを除けば，そんなに固執すべきものではないのであろうか。「人を社会的存在としてとらえる時，その人らしく生きていくためには，私の眼でとらえられる現象としての人と人との交わり・対人関係が，その人の発達，とりわけ社会性・情緒発達において必要であるはずだ」というなかば確信めいた枠ぐみをもっていた気がする。そして，それは正しい真理であるとさえ自負している。

しかしながら，私の目でとらえた対人関係・眼に映った現象での対人関係を，その人の対人関係ととらえてきたことに，大きな疑問を抱き始めた今回の実習でもある。生きてる人を見つめる私の眼のうつろさに気づいた実習であったような気がする。動かぬ〈かれら〉を見て、外界を知覚することもなく，情緒それすら持っていないのではないかと感じた1日目。行動のうえで，からだとからだが触れあうことがないから，まったく仲間としてのかかわりあいがないのではないかと感じた2日目。少なくとも，私の眼には，そうとしか映らなかった〈かれら〉の群像である。

4日目の午前中の中2病棟である。いつものように朝の会が催された。司会はヨシヒコ君。彼は，皆の前で司会という役割を課せられて緊張のあまりトイレへ。戻ってきてもふたたび，トイレ。指導員さんに抱かれた彼の表情は，まざまざと緊張感が浮かびあがっている。

その間の代理はアッちゃん。出席確認の時には，指導員さんが名を呼べば，その子の頭をなでにいく。とっても可愛いしぐさである。そのアッちゃんの表情・仲間としての配慮と親しみの情はどうだろう。名を呼ばれた者の生き生きとした眼はどうだろう。動作は伴なっていない。あのまったく目立たないユーちゃんでさえ目をキョロキョロとして，名を呼ばれたことのうれしさを全身で訴えているではないか。大きな動きを伴なったかかわりあいの現象はないとしても，〈かれら〉は，仲間を仲間として認めかかわりあっているのだ。

背のなかをはいずりまわるアッちゃんに足を踏んづけられたユーちゃん。その瞬間のユーちゃんのアッちゃんに対する怒りの眼，痛さの表情，その瞬間にユーちゃんのアッちゃんに対する生きた訴えがあるのだ。動けぬ〈かれら〉であっても，生々しい感情交流は，中2病棟全体のなかを流れているではないか。

子供カンファレンスで名札をはずされ，集団に入っている資格がない失格者だとして自らディルームを這って出ていったサッちゃん。そのことを話し合いで解決しようとアピールするヨシヒコくん。今，話しあう必要はな

い。本題に戻るべきだと主張するアッちゃん。エイコちゃん。トシコちゃん。対等に皆がぶつかりあい，そのグループを尊重し，そのグループに誇りをもっているのだ，生きた感情をぶつけあってる生きてる集団がちゃんとあるのだ。1日目には，あまりに静寂に思えた，あまりに無交流に思えたこの中2病棟の集団なのに，実は，ダイナミックな感情が生きてる集団であったのだ。なまの感情を持ち，なまの感情をぶつける人間存在としての〈かれら〉がつくりあげた世界が展開していたのだ。家族としての・仲間としての連帯が，〈かれら〉ひとりびとりを強く強く結びつけているのだ。

たしかに，きわめて繊細で，かすかな，瞬間的な訴えである。それにしても〈かれら〉すべてが，程度の差こそあれ，自分を仲間に訴え，仲間の訴えに耳傾けている仲間ではないか。ミカちゃんとの取り組み，エイコちゃんとの取り組みのなかで，私自身の一人よがりの観念的枠ぐみから，少しずつ私が脱け出してくるうちに見えてきた〈かれら〉の本性であり，生存在の証しであろうか。日頃の臨床実践をとおして，改めて我と我が身に問いかけなおす私である。

まとめにかえて

4回目のコロニー実習を終えて，重症児とよばれる〈かれら〉とのかかわりを通じて生じてきた私の内での私自身への問いかけは，何らこたえを見つけられないままである。こたえを見つけるというよりは，問いかけ続けていく歩みを新たに始めたといえるのかも知れない。その歩みは，こころを病める人・苦しむ人と接していく臨床活動のなかで，恐れさえも伴なった，不安と対座したままの歩みである。

中2病棟の仲間を〈かれら〉としかよべない今日の私である。〈あなたたち〉としてふれ合うには，重複障害に苦しむ人たち・中2病棟の仲間たちと，まだまだ，距離がありすぎる今日の私である。

1. 人をわかろうとすること

重症児と呼ばれる〈かれら〉とのかかわりを求めて実習に参加してきた私。そのかかわりは，ひとりの人を，そこで生きてるひとびとをわかろうとする過程でもある。“わかろう”とする私の思いは，心理治療というもとで日常出会っている多くの障害児・病める人に対して，“こんな私でよかったのだろうか？”“本当にその人の苦しみを苦しみとして実感できていた私なのだろうか？”という治療者としての確かめなのである。少なくとも，その人を“わかろう”としている私を見つけることでもある。

重症児である〈かれら〉も，それがひとりの人間であることにはかわりはない。私の目の前にいるその人を，今あるその人をありのままに“わかろう”とすること。それは，観念的，一般的，抽象的次元での眼によって開かれる扉ではなく，実在的，個別的，具象的次元での眼によって成されうるものである。かといって，そうだということを観念的にはわかっていたとしても，かかわりのなかで，その眼だけで〈かれら〉を見つめることが何とむずかしいことか。

そこには，運命とはいいながらも決定的障害を背負って生きてる〈かれら〉に，「気の毒だなあ」「可哀そうだなあ」「そんなにしてまで何故生きるのか」「何を求めて生きるのか」といった同情をさし向けることしかできず，不公平な運命を運命として受けいれて無心に生きていく〈かれらその人〉を見ようとしない・できない私の愚かさがあるからである。不公平な運命を不公平として一緒に呪うことをしてあげられない私。

人が生きていくうえに，“何故？”“何を？”の問いかけが何の力になるというのだろう。人生を歩むこと・人間存在を価値を伴ってしか見られない観念・欺瞞ではないか。“いかに生きていくのか？”という“どのように？”を問いかけていくべきではないか。そして“いかに生きているのか？”という今ある〈かれら〉をわかろうとすることこそが，生きてる人・生存在への尊重であり，かかわりの始まりではなかろうか。わかることができる私であろうとなかろうと，“わかろう”とする私であることに気づかねばならないのだ。たしかに不安である。恐怖である。わかることができない冷淡な私が，自己の横暴さに気づかず〈かれら〉の世界に踏みこんでいるとしたら…　しかし，こんな大それた不安は，恐怖は，かかわりを持とうとするかぎり消え去ることができない宿命的なものではないか。

“わかろう”とすることだけを自己欺瞞的に論じているのではない。ミカちゃんの叫びをわかろうとしてきたこと，そうした私がミカちゃんに伝わったこと，ミカちゃんが私をわかろうとしたこと，そこにふたりのかかわり合いがあったのではなかろうか。共存在としてのミカちゃんと私が，“わからねばならない”という観念での執着を離れて，“わかろうとしかできない私”をミカちゃんとのなかに見つけたことが私の精一杯の成長であったのだ。そして，そうした私であることを〈かれら〉に伝えることが，私の〈かれら〉に対する精一杯の存在価値なのである。

2. ともに生きるということ

〈かれら〉は間違いなく，かかわりあって生きていた。集団のなかの仲間として生きていた。かすかに，瞬間的にしか反応できないとしても，そのかかわりあいのなか

で生きていた。私の眼に，〈かれら〉のこうした相互の生きざまが・群像が映るには，かなりの時間が必要であったけれども，私の存在の有無には関係なく，集団としてきわめて自然に生きていた。

〈かれら〉の本来の生活の場が，こばと学園であろうとなかろうと，とにかく〈かれら〉は，仲間として生きていた。保母さん，指導員さん，看護婦さんの顔が，年月とともにかわろうとも，〈かれら〉の顔はかわらずに，同じ仲間として生きていくであろう。こばと学園という世界に，ひとりひとりの人生を跡づけしながら…　毎日毎日，毎年毎年，発達しながら生きている。みんなみんな大きくなっている。やがては，同じように老いていく。

数十年後のこばと学園では，どんな〈かれら〉として生きているであろう。同じこばと学園で同じ仲間が人生をともにしていること，ひとりひとり自分の世界を持ちながら，仲間の世界ももって生きていること，このことに何ら異和感はない。〈かれら〉のこころとからだは，今のこばと学園にあるのだから。物理的には狭い限られた世界であるかも知れない。そうした世界であっても，〈かれら〉には，現実にある仲間との唯一の世界なのである。社会なのである。介護されてるという受身的存在であっても，生きてる主体にかわりはないし，かかわりあう主体にかわりはない。それは歴然たる事実なのだ。社会的存在として自己を訴えている〈かれら〉なのだ。私たちとのかかわりが〈かれら〉の世界の拡大につながっているとすれば，世界内存在としての〈かれら〉自身の発達の場がどこであろうと，少なくとも私は救われる思いである。かかわりの視座をこうしてふたたび，私はみつめていきたいと考える。

文　献

Blatt, B. 1969 Purgatory. In M, Rosen at al. (Ed.) *The History of Mental Retardation.* Vol II. Baltimore : Univ. Park Press. Pp 345-360.

村上英治　1976　重度心身障害児　　川島書店

A HUMANISTIC APPROACH TO THE SEVERELY PHYSICALLY AND MENTALLY HANDICAPPED (the 8th report)

– Self-criticism through the contact with them –

Saiken YUZURI

This report was based on the contact with the severely physically and mentally handicapped in the Middle IInd Ward in the Kobato-Gakuen.

The purpose of this report was to clarify the worth of their lives from the standpoint of a humanistic approach.

For this purpose, first of all, I could not but criticize for myself. That is to say, I had to muse on whether I could empathize with them in their anguish through the contact or not.

The results were as follows.

1) I could not empathize sufficiently with them in their anguish but could only try to do so through the contact. Such orientation that I was going to aim for was my level best for their developments.

2) I didn't know the way of their lives as a "Family" with affectional communication in the Middle IInd Ward till I tried to empathize with them from not ideal realism but existential realism.